櫻園通信 第32号

櫻園通信 32. 平成 28 年 3 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー

穂積橋 ほづみばし

越前藩の松平春嶽、宇和島藩の伊達宗城、土佐藩の山内容堂、薩摩藩の島津斉彬は、幕末の政局において公武合体を目指し、幕末の四賢侯といわれた。

その一人の伊達宗城の城下町が四国の宇和島にある。今日は古いお城が主な観光資源となっているひっそりとした小さな町であるが、宗城治世の幕末には、高野長英、大村益次郎、二宮敬作(F.シーボルトの弟子)、お稲さんなども住み、当時先進的な文化の栄えた町である。

穂積橋　宇和島市の中心部の辰野川にかかる

町の中心を流れる辰野川に、「穂積橋」という観光名所がある。小さな橋であり、橋のたもとに大きな郷土料理の店「ほづみ亭」がある。橋のたもとに四国ガス寄贈の古めかしいガス灯がある。

橋のたもとの小公園に、郷土出身の偉大な法律家、穂積陳重(ほづみ　のぶしげ)のことばが、解りやすい言葉でかかれた新しい石碑がある。

> 老生は銅像にて仰がるるより
> 萬人の渡らるる橋になりたし

と書いてある。

さて、橋の名前の由来となった穂積陳重のことであるが、宇和島出身の人で、旧宇和島藩の貢進生として、 16 歳の時上京、南校(東大)を卒業し、日本で最初の帝国大学法学博士になっている。

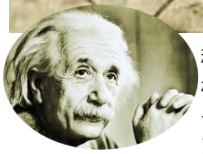
日本における民法の生みの親と言われているが、縁あって、渋沢栄一の長女歌子と結婚している。しっかり者の長女歌子とその婿の穂積は渋沢家・家法の制定など、一族に強い影響を与えている。

渋沢栄一が静岡藩から明治政府に移る明治 3 年、伊達宗城が松平春嶽の後の民部・大蔵卿を務めている。明治政府設立当初の議定(重要閣僚)であった松平春嶽と伊達宗城は、もともと公武合体が身上であるが、新政府に徳川人の登用を試みている。伊達宗城大蔵・外務卿の秘書の郷純造の推薦で渋沢は明治政府にリクルートされることになる。

始め渋沢は固辞しているが、断れば静岡の徳川慶喜の立場が悪くなると大久保一翁に説得されて上京、さらに大隈重信に説得されて、

日本最初の法学博士
穂積陳重

渋沢栄一の長女
歌子



穂積陳重は大正十一年に小石川植物園で開催されたアインシュタイン夫妻公式歓迎会にも出席。アインシュタインは日本に向かう途中でノーベル物理学賞受賞の知らせを受けた。

明治3年に改正係長に就任している。

山本七平の書に詳しいが、改正掛というシンクタンク的な組織の長となり、旧幕臣の前島密、杉浦愛蔵らも引き込むことになる。大久保は旧幕時代から、松平春嶽や伊達宗城とは気脈を通じている関係があってのことである。次第に明治政府の要衝は薩長閥に占有されては行くとはいえ、後の明治 5 年に、大久保一翁や勝海舟が明治政府に任官する布石となっている。また、渋沢家の長女の婿に伊達宗城地元の俊英・穂積陳重を配した背景には、渋沢栄一と伊達宗城とのこのような関係がある。

陳重は学究一途にとどまることなく、貴族院議員、帝国学士院第1部長、文政審議会委員などの要職に就き、晩年には枢密院議長をも務めたが、1926(大正15)年4月 7 日、71歳で死去している。また、本業の民法関係のほかに隠居論という大部を出版しており、社会への強い関心は、は彼の法学の骨格をなすものと言えよう。

さて、穂積橋のことであるが、橋の袂の古い石碑には、命名の由来が詳しく書いてある。橋のたもとのほづみ亭側に石碑がある。もともと宇和島尋常小学校に、昭和 3 年の御大典記念に建てられたものが移築されているのだ。

橋の命名の由来を書いた古い石碑

ほづみばし　　橋名の碑

法学博士男爵穂積陳重先生は、我が郷土の生んだ偉人であり、われら市民の慈父である。曽て同郷有志の間に、先生の銅像を建設したいという相談が起こった際先生は徐にこれを志りぞけ、先生は、「銅像にて同郷萬人に仰ぎ視らるるよりは、橋となって公衆に履んで渡らるるを以て無上の光栄とす。」と仰せられて、容易にこれをご承認下さらず。偶々本年の春、本開橋が改築されたので、茲に有志は県の許可を得てその名を改め「ほづみばし」と称して先生永久の記念とした。ああ、橋名すでに命ぜられて先生今や亡し、我等は銅像を仰いで高徳を敬慕できぬけれど、この橋をわたって伏して深恩に感謝することを忘れてはならぬ。

御即位大禮記念事業の一つとして
昭和五年十月十日　これを建つ。
宇和島高等尋常小学校職員児童一同

穂積陳重夫妻は、渋沢銅像の設立に関しては、一家こぞって参加している。

穂積にとって銅像は、岳父の偉大な姿であり、多くの銅像を見せられて、俺は結構だという堅い気持ちがあったように思われる。

今日、石碑や観光パンフレットの「ほづみ橋」の記載の中では、渋沢栄一には全く言及されていない。

穂積は 71 歳と比較的長命ではあったが大正 15 年に死去している。渋沢は 91 歳とさらに長命であり、橋のできたとき渋沢栄一はまだ存命で、国民的英雄視されていた。橋の名がつけられた当時は、穂積と渋沢の関係は、宇和島の関係者の間では周知の事であったろう。しかし、渋沢への遠慮が碑の説明に反映されているのであろう。ただ、渋沢が文明国の象徴として東京に瓦斯灯建設に心血を注いだガス灯が橋の脇にあることが、辛うじてそのことをしのばせる。

東京・板橋区の巨大な渋沢栄一銅像。板橋区の登録文化財に指定

ほづみ亭で、郷土料理の昼食をとったが、湯飲み茶碗にこの名言が焼き付けてあった。店員は渋沢のことは全く知らず、ただ穂積橋の袂の料亭という意味で名付けられたという。事情を話して、同店開業記念の湯飲み茶碗をいただいた。このような次第で、展示ケースに、穂積の「隠居論」、湯飲茶碗と、穂積橋の写真を展示している。

（稲松孝思）

ほづみ亭の湯飲み茶碗

隠居論　高齢者への社会的対応のあり方を説いた**世界的にも老年学の先駆け**といえる書